

「物語」が語りをはじめとする諸々の要素が絡み合う中で構築されていることを再確認させられる。

Ⅲ 「拓かれる語りの地平——中世・近世、そして近代へ」。

ここでは、主に『源氏物語』の享受についてまとめられている。高橋亨「源氏物語」をめぐる語り手と作者の系譜」は、歴史的要素をふまえてとらえられる〈作者〉紫式部像について論じている。クリスティーナ・ラフィン「中世女流日記と『源氏物語』」は、『源氏物語』が中世の女性たちの日記にどのように解釈され扱われたかについて論じている。昨今注目される源氏絵研究では、エステル・レジエリー・ポエールが「新しい読みの地平へ——土佐光則が描いた源氏絵——」で、場面選択（絵画化される場面がどのように選択されているのか）研究の、図様を簡略化し体系づけようとする傾向に慎重な姿勢を示し、独自に源氏絵を四つの類型に分類したうえで、土佐光則による源氏絵の性質について論じている。その中で氏は徳川美術館本『源氏物語画帖』の若紫巻・権本巻、フリア美術館本『白描源氏物語画帖』を取り上げ、「絵の変奏」に注目し、物語テキスト

と絵、また絵画制作に対する絵師の関係を考察することで、光則の「パターンからの乖離」を基盤とする彼の在り方に迫っている。

本章では近世以降の語りする方法についても扱われ、長島弘明「春雨物語——反・近世小説としての語り——」では、上田秋成の執筆当時の境地や近世小説の傾向を鑑みつつ、同作が当時考えうるすべての文体の可能性を試みたものだとする。また、谷崎潤一郎の『鍵』の語りについて論じたエステル・フィゴン「読むことまたは性愛」では、主人公とその妻のそれぞれの思惑のもとに書かれた日記が、互いに書かれ・読まれ・読み返されることで展開する同作が、書き手・語り手・読み手の位相を複雑化することで語りが変容していく様を検証し、谷崎作品の語りの問題を提示している。

そして寺田澄江によるⅣ「総括」では、パリ・シンポジウムまでの経緯や当日の発表の様子や質疑のほどが要約され、会場の熱気が伝わってくるほどであり、本書所収の論文を一読されたあとで、この総括を見直してもためになるだろう。

本書は、『源氏物語』に関連する論文が

大半を占めるものの、扱われている問題は普遍的であり、「物語」に関わる研究の様相を大まかに古代から近代にいたるまで見渡すことができ、現代人としての自らの「読み」について考えさせられる。

（ほりこしもゆこ 大学院前期課程在學生）

小峯和明

『東奔西走』

——中世文学から世界の回路へ——

権 香淑

本書は、著者が十八年間勤めた立教大学の定年退職を迎えるにあたり、今までに書いた短文類、特にこれまでの論文集等に入られなかった短いエッセイ等をまとめたものである。

その内容は、著者が国内や海外に資料調査に赴いた時の旅の印象なども交えて異文化に焦点をあてたものとなっている。国内外の多くの地を訪れ、様々な書物や資料、そして人々に出会い、本書はそうした出会いの賜物である、と著者は述べている。

本書の構成は以下の通りである。

はしがき―「人の交わりにも季節あり」

I 中世文学から世界の回路へ

II 欧米を往く

III アジアを往く

IV 日本を往く

「はしがき」では、「人の交わりにも季節あり」という南方熊楠の言葉を用い、書物や資料、そして人々との出会いこそが著者の研究に生きる力と支えになった、と本書を出すに至った経緯や心情が綴られる。

「I」は、1 文学研究の意義古典文学の立場から、2 古典学の再構築をめざして平安文学研究の内なる（他者性）、3 異文化交流の文学史へ海外資料調査と国際会議、4 中世文学から世界の回路へ、5 立教大学日本学研究所のこと、の五つの部分からなる。

「1」では、古典文学の立場から文学研究の意義について述べている。現代に価値を認められ、見出されてきたものが古典であると定義づけ、そこには絶対的な權威などなく常に新しい解釈が与えられ、絶えず

読みの更新がなされると指摘する。そのよ
うな古典が多く残されている日本の文化を
世界に発信していくためには時代やジャン
ルを超え、また文学以外の歴史、民俗、宗
教、美術等々もあわせた専攻を複合的に輻
輳させるべきであり、今後の展望と課題と
して、学際と国際の二つの柱、他分野との
競合、漢文文化圏における比較研究、図像
資料の海外調査と解題研究の三つのキーワ
ードから提言している。

「2」では、川平ひとし氏の遺稿のひと
つ和歌文学会五〇周年記念のエッセイ「内
なる他者性」を受け、平安文学研究の「内
なる他者性」の問題を提起し、「他者性」
の指標に、地域、時代、領域・媒体の三つ
を掲げ、従来の方を越える方策を提言
している。すなわち、東アジア漢文文化圏
への視座、『源氏物語』帝国主義や古典の
カノン化からの脱却、法会文芸と仏典の物
語力の再評価である、と指摘する。

「3」では、著者自身が参加した海外資
料調査と国際会議や対外交流について述
べ、数々の資料調査や人々との出会いを通
して変容してきた著者の三つの研究テーマ
――絵巻・絵本などの絵画テキスト、東ア

ジアの漢文説話、異文化交流の文学史につ
いて述べている。

「4」では、著者が参加したアメリカの
ワシントン議会図書館の調査やイェール大
学での日本仏教をめぐる研究集会への招待
時のエピソードが綴られる。海外所蔵の資
料や海外の研究者に出会うことで、海外の
日本研究を無視しえない時代の到来を感
じ、中世の説話や物語を通して世界に連な
る回路を模索したい、と著者は述べている。

この部分の初出は前述の「3」の内容より
早く、やがて「3」で示される著者の三つ
の研究テーマへと発展することになる。

「5」では、海外の研究者との交流促進、
研究協力体制の確立ないし支援のため、二
〇〇〇年に開設された立教大学日本学研究
所について紹介している。

次いで「II」は、著者が欧米に資料調査
や国際会議に赴いた際の内容で、それぞれ
の題目を列挙すると、1 イェール大学
蔵・日本文書コレクション目録解題、2
ワシントン議会図書館の和古書資料、3
議会図書館及びイェール大学所蔵朝河収集
本をめぐって、4 ニューヨークと絵巻、
5 在米絵巻訪書おぼえがき、6 チェス

ターピーティ・ライブラリー所蔵絵巻・
絵本解題目録稿、となる。

欧米に継ぎ「Ⅲ」では、アジアの各地への資料調査や旅の様子が綴られる。各標題を記すと、1 台北の民間劇場、2 柳絮舞ふ町で北京の七十九日、3 戒台寺の一夜、

4 台北・北京における和古書及び絵画資料についての覚え書き、5 中国古塔千年紀遼の面影をもとめて、6 塔は時空を越えて、7 馬耳山のお堂の壁画、8 東アジア（知）の遊学のために三冊の本、となっている。中でも中国遼代の仏塔をもとめて各地を旅した記事は、私も同行していて懐かしく親しく格別な思い出である。著者と奥さんと高陽さんと私の「四人組」で、遠くは内モンゴルの奥地まで出かけ、よく行き当たりばつたりの旅をしたものだ、と今でも思う。大粒の雹に降られ、エアコンの効かないタクシーの中で電宿りをし、夕方ようやくカパーにも掲載する中京の大明塔にたどり着き、真っ赤な夕日に照らされた塔を見上げた時の感動は今でも忘れられない。仏塔に関する大まかな情報だけを頼りに現地で道や場所を聞いたりしながらも無事に旅を続けられたのは、仏のご加護であ

ろう。いつの間にか私自身もすっかり塔に魅了され、「塔マニア」になりつつある。

欧米、アジアに続き「Ⅳ」は日本国内に目を向けたものとなっている。標題の列挙は省略するが、琉球や尼寺の調査、四国善通寺の典籍調査などの内容からなる。

以上、本書の各部分の概略についてみてきた。本書を一読すると、著者が提唱する東アジア資料学の確立、文学研究だけでなく、さまざまな異分野との学の提携など、広大な研究の世界が浮かび上がってくる。本書は、著者がこれまで歩んできた研究の足跡を一望できる一冊となっている。また、学問の研究ばかりでなく「人の交わりにも季節あり」という言葉のように、書物や資料、そして人々との出会いを大切にしてきた著者の人生哲学を垣間見ることができる。

本書の最後に、著者の略歴、海外での活動、講演、国際学会発表のリスト、著作論文目録が一覧できるが、その精力的な活動ぶりには只々圧倒されるのみである。表紙の左端に「絵巻の虫」と題した「小峯先生が妖怪になった図―小峯夜行絵巻―」というイラスト（吉橋さやか作）が載るが、その通り著者は「只人にあらず」、そう思え

てならない。

（二〇一三年三月 笠間書院 二五九頁
本体一九〇〇円）

（ごんこうしゆく 大学院後期課程在學生）